

〔備前老人物語〕二關、原陣の前に、石田治部少輔成○三一騎がけに、佐和山より大坂にはせ來り、増田右衛門尉に參會し、密に談すべき事ありとて、數寄屋に入て物語してけり、初はなに事をかたられたりけん略○中 太閤様御わづらひ御快氣の刻貴殿我等共をめされ、汝等に百萬石づ、被下べし、其故は今度病氣中に、いかほどの事をおもひたりけむ、汝等を大名になし置なば、万事心やすかるべしとおもふなりと、おほせられし、皆々目を見合せ、さてもありがたき仰かな、なにとも申すべきことばもなし、玄かれども人口も御座あるべければ、かさねてこそ仰をば奉るべしと、達て辭し申せし事を思ふに、かへらぬ事にてはありけれど、くやしかりし事かな、その時百萬石を領したらば、なにの不足かあるべき、ともかくにも我人數をもたざれば、思ふに益なし、口惜しき次第なりとて、歸りしと也、かゝる大事の事どもをば、誰か聞傳へたりけむ、たしかに人の語りしを聞たり、不審なる事共也、

〔常山紀談十二〕東照宮景勝征伐の御時、小山にて、略○中 花房助兵衛職之を召て、汝は近年佐竹が許に有て、義宣が心はよく知たらん、略○中 義宣謀反の志あるまじとならば、起請文を書いて、我に見せよと仰られしに、花房略○中 起請文は御ゆるされを蒙るべしと申す、東照宮、助兵衛は浮田が家の長臣と聞たりしに、器量の小さき男よとて、大息つがせ給ふ、花房かくと後に傳へ聞、われ起請文を書ならば、佐竹二心あらじと、軍兵の疑を散せん爲の仰なりしに、察せずして、起請文を書ざりけるこそ口惜けれ、たとひ義宣、軍を出したりとも、我何の罪の有べきと、深く悔みけるとぞ、

〔駿臺雜話二〕風俗は政の田地

万治寛文のころかとよ、世に鶉はやりて、略○中 阿部豊後守忠秋も、其ころ鶉をすかれて、常に籠を座側に置てなかせてきかれけり、それをさる列侯なる人き、て、其ころ世にかくれなき鶉を厚價にてもとめて、ある官醫をもて、ちかきころめづらしき鶉をもとめ得て候、御慰に進したきよ